

「家がいいね」第186号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊誌

2019. 11. 5

懐かしき帰郷

古希だからと中学の同級生が同窓会に誘い、汽車で片道4時間の旅でした。越美南線を国鉄から引き継いだ長良川鉄道は鄙びた路線です。保線されていても、横揺れします。会では五十五年も空けての邂逅でも思い出しては記憶を呼び覚ます不思議世界でした。



私の実家は酒タバコと駄菓子を商っていました。悪ガキだった同級生が言うには、祖父の太郎兵衛の目を盗んでは菓子を友達に放り投げたそうです。知っていても見逃すような祖父だと思ひ出します。今はその悪ガキのほうが生き生きした表情をしているのは面白いものです。ファミリーヒストリーをまとめるための情報を得て、帰途につきました。

ピンピンコロリは、実現困難なもの

翌祝日は神戸の、死の臨床研究会に行きました。救命救急センターの医師が、人生の最終段階でありながら、救急車での受診になった場合の現実を克明に報告されました。高齢者の割合が相当高く、その中には臓器不全や癌末期の方も含まれる場合、救急医たちも葛藤の中で対処するそうです。たしかに直ぐに外来死亡になったり、入院しても短い時間での逝去になるのですから。米国では救急外来で緩和ケア対応が始まり、職員への支援の研修もあるとのこと。私も地元の救急病院での見学をした時に同じ思いをしました。死亡の判定をしてもらうため、多数例を病院に送る体制には疑問を持ちます。

驚いたのは図のような心マッサージ機を繋いだ患者さんが実際に来た事です。蘇生困難でも家族の到着を待つまで、機械は止められませんでした。むなしい時が流れました。



診察で交わす言葉 6 「こんな急なこと！」

本当に台風が次々襲った10月でした。12日は荒天に慌て休診としました。気象情報を受けても風雨が対応を上回る事態が生じました。身体も自然物ですが人間には心理があるためか進路予測の如く先の症状の見通しを伝えても、変化に直面するまで対処しません。心理的には変化を望まないと思つた結果「こんな急に」と思っわけですね。それで、もしもの時の前に、事前意志決定を話し合ひましょう（ACPあるいは人生会議）と推奨されます。でも文章化することも含め、実施する人は少ないようです。



実はACPを使うのは遺言めいた手続きではなく、普段の生活を改善することに主眼があります。米国の特養ホームでの実例を紹介します。画一的なホーム生活の中で、ACPで意思表示した人は、そのスタイルを尊重されます。ゆっくり起き食事を楽しみ、健康第一や薬を強制されず、衣服も好みの私服を着用できるといふ取り決めだそうです。つまり施設でも自宅同様に希望は実現できるといふことですね。でも家では当たり前なことです。

休診日のお知らせ

10月22日は今年だけの臨時休日、伊勢をウロウロしました。二見浦で自撮りです。休診は、11月30日(土) 12月21日(土) また来年1月11日(土) ご了承を。年末は12月28日(土)まで開院し、年末年始の休診は、29日から1月3日です。



自宅での人生を 最期まで支援します
〒516-0805 三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ http://isezaitaku.com

↑バックナンバーはここで閲覧可